



右脳の空手

東京大学名誉教授・東京西北 RC 大坪 英臣様

紹介者 木宮 雅徳会長

65歳で空手を始めた

現役時代は船舶工学の発展に少なからず貢献できたと思う。日本造船学会会長、日本計算工学会会長、国際船体海洋構造会議委員長、日本学術会議会員を歴任した。

今から18年ほど前に東京大学を退職して4年ほど経って65歳の時、成り行きで空手を始めた。無謀にも直接打撃や蹴りを加えるフルコンタクト空手であった。右も左もわからない入門4ヶ月後の東京支部大会で40歳以上のシニアの部（10人弱参加）で準優勝した。決勝戦での相手は黒帯の指導員であった。翌年は再び同じ相手を決勝戦で破って優勝し、3年後に初段に、6年で二段に、さらに昨2019年に参段となった。現在は真義館総本部指導員・本部直轄東京道場長である。

初段を取るあたりから、真義館麻山慎吾館長の個人指導を受け始め、それまでの格闘（スポーツ）空手と全く異なる、筋力を使わないで相手を崩す武術空手の道に入り込んだ。

格闘空手の一流の選手であった館長が激しい筋トレの結果生じた腰痛のために空手を断念するまでに追い込まれていた。腰痛でも出来る古伝の型の稽古を始め、それを真摯にやりこむことで、一生治ることなどないとあきらめていた腰痛が突然直った。とともに、期待もしていなかったが不思議な力を得るようになった。相手の身体や周りの空間に光る点が複数現れ、その光る点のいずれかに手足を出せば、相手が崩れてしまうのである。強く出す必要はなく、そこに置くように出せばよい。このように館長は古伝の型を基本とした武術空手の道を歩み始め、瞬く間に達人のレベルに達した。今から20年ほど前である。本来の沖縄古伝の空手は、術を習得した師から一子相伝の形で伝えられるものであるが、麻山館長は独自で型への常軌を逸した真剣な取り組みで、そのようなものがあるとも知らずに、型の持っている不思議な力を会得した。

その空手は、力を抜いた自然体のまま、型に則った動きをすることで、攻撃してくる相手を制圧するのである。相手は抵抗できないで倒されてしまう。

麻山館長に個人指導を受けるようになり、私も武術空手の入り口に立つことが出来たような気がする。70歳の時に、格闘技空手の弱者であり、老年にもかかわらず、真義館総本部の世界チャンピオンクラスの指導員の中に5人目の指導員に任命され、武術空

手に特化した道場である直轄東京道場を設立され、その責任者に任命される。

なぜ攻撃する側が無力化されるか？ なぜ右脳の空手か？

沖縄で古くから伝承されている「サンチン」をはじめとする型を正確に習得することで身体をつくっていく。型をやりこむことで手足の動きが身体の中心につながった動きになる。これを「統一体」と呼ぶ。

このように身体の各部分がつながって一体として動ける「統一体」の状態では何故か相手とも調和の状態となる。格闘技空手のように相手と衝突せずに相手を崩してしまう。攻撃する相手は身体を制御できずに崩れてしまう。これを「無力化」と呼ぶ。

この「無力化」の原理を完全に理解することは現時点では難しいが、2つの実験がある。

その一つはベンジャミン・リベットの实验がある。

情報が神経パルスとして末端から脳にたどり着くのに速度はあまり早くないため瞬時でなく、若干の遅れがある。これを利用すると相手を無力化することができる。詳説略。

もう一つの実験は保江邦夫の実験である。これによると、術が成功するとき（攻撃する側が崩れるとき）、攻撃を受ける受け手の右脳が非常に活性化していて、その時攻撃する攻め手の大脳が瞬間的に機能低下し、身体のコントロールできなくなることがわかった。ただし、何故、受け手の右脳の活性化が攻め手の大脳機能低下が起こすかは現時点では説明できない。しかし、剣術の過去の秘伝や実際に術をかけるときの実感と一致する。この、原理が拙書「右脳の空手」の表題の由来である。

筋力も運動神経も使わず、ただひたすらに研ぎ澄まされた集中力で右脳を活性化する空手は、空手道の流派は数多いなかで真義館を含めほんの少数しかないと思う。筋力にもスポーツの才能にも頼らないということは、むしろ年齢や男女差は関係ない。現実に東京道場の弟子の最高年齢は男86歳、女79歳であり、女性の比率も40%近い。もちろん他流派の黒帯を持つ若い道場生も多い。みんな喜々として稽古して、相手の成功に拍手し、稽古場は明るく笑いが絶えない。稽古を重ねるにしたがい、体幹が強くなり、身体が強靱になっていく。同時に、心も変わっていく。